

目からウロコの
必笑レッスン!!新GOLF練習嫌いはこれを読め!
「スイング強化書」

ボストン・ジョー・ウルフ

内藤雄士
ツアープロ
X 弘兼憲史響中
大反売中オルカラー128P
定価1260円
978-4-09-103154-9
小学館

名を明かそうとはしない。

一方、野中氏の講演内容について報じた4月28日付の琉球新報を受け、各全国紙は簡単な後追い記事を書いたが、やはりカネを受け取った評論家の名については追及していない。

歴代官房長官と大メディアが歩調を合わせたような、この奇妙な沈黙は何を意味するのか。

「官房機密費」とは正式には「内閣官房報償費」という。使途を明らかにしない内閣の予算のことで、機密

外交、国会対策などに広く使われてきた。外交ジャーナリストの手嶋龍一氏はNHKの官邸担当記者時代、「官房長官室にある金庫の中を見せられたことがある。現金の札束が入っていた」と証言する。

今、私の手元に3枚のメモ書き(35ページ写真)がある。1枚は下に「内閣」と印字され、政治評論を主とする言論人約20人の名と、万単位の金額と思しき「200」「100」といった数字が手書きで記されている。

「料亭の女将が紙袋を持ってきた」

この種のメモは注意深く扱わなければならない。全てが評論家に渡ったとは限らず、途中で誰かに「抜か

「これは官房機密費の配布先リストです。盆暮れの年2回、リストの相手に配っていた。メモは89年頃に作成されたもので、歴代の官房長官秘書官たちが前任者のメモを書き写し、またその時々で書き換えながら受け継いできたものです」

「第2次中曽根康弘内閣で官房長官になった藤波孝生(在任83〜85年)は早大の後輩で、『急に忙しくなって、約束していた2つの講演ができないうので、代わりにやってくれませんか』と頼んできた。引き受けることにしたら秘書が100万円を持ってきた。藤波のポケットマネーだと思って受け取りました。領収証も書いてない。」

平野貞夫(元参院議員)が爆弾告発

私は機密費で政治部記者の「酒と女」を世話した



私が昭和40年から園田直衆院副議長の秘書をやっていた頃、園田さんの使いで官房副長官室に行くと、竹下登さん(当時官房副長官)が報償費(官房機密費)を月々300万円くれたから、新聞記者相手にかなりの額を使った。

「女」の値段も含まれていた。そのあと私は帰るが、記者連中は女とホテルに泊まる。A社の記者は行かなかったけど、それで翌朝、副議長公邸に集まった記者たちと朝食を食べる。そんなことを月に1、2回やっていった。いまの新聞社の上の世代、政治部長や編集委員ぐらいまでは、そういうことをしてきた。それから、自民党を離党した

後、羽田孜政権のとき、熊谷弘官房長官と私と、現在も活躍するある政治評論家、名前はいえないけど、3人で食事することになった。ところが、熊谷さんが行けなくなっちゃった。そこで、「これ渡しておいて」と預かった白い封筒を、その評論家に私が料理屋で渡した。彼は当然のように受け取ったよ。あれは間違いなく報償費だった。

「これもメモであり得る。また、特定の評論家を貶めるために、配るつもりはないのにわざとリストに名を加える可能性もあるからだ。そこで、リストに掲載された評論家のうち、存命の人物に真偽を直撃取材した。まずは三宅久之氏。5月7日に収録された『たかじんのそこまで言って委員会』(讀賣テレビ系、5月16日放送)がメディア特集を組み、私も出演した。そこで収録中、出演していた三宅氏にこの件を質問すると、『デタラメだ』と一蹴されたが、後日、改めて取材を申し入れると、三宅氏はこう答えた。

「野中さんの使いだという料亭の女将らしき女性が『反物』の入った紙袋を届けに来たことがありました。しかし、内閣からカネをもらったことは一切ないし、野中さんからは菓子折りひとつももらっていない。今回の発言には大変憤慨している。ああいうことをいうなら、誰がもらったのかはつきりいつてほしい。痛くもない腹を探られ、ネットでも『三宅を殺せ』とまで書かれ、迷惑千万です」

野中氏が唯一、名を挙げた田原総一朗氏も「これまで一度ももらったことはない」と話す。